

大学における「英語教育活動」に関する現状調査

〈英語担当教員用〉

報 告 書

調査実施概要

1. 調査実施機関

(財)日本生涯学習総合研究所

2. 調査テーマ

大学における「英語教育活動」に関する調査

3. 調査対象

大学の英語担当教員

4. 調査時期

平成18年11月 ~ 12月

5. 回収数

有効回収数 162

国 立	公 立	私 立	合 計
18	12	132	162

6. 調査方法

送付・回収とも郵送によるアンケート調査

・ 新入生に対する英語教育について

- 1) 平成 18 年度入学者の英語の学力レベルは以前(2～3年前)の入学者と比べて変わっているか

2～3年前の入学者に比べて英語の学力が「全体に下がっている」と回答した教員は、「特に変化は見られない」「全体に上がっている」とした教員を大きく上回っている。ただし入試の多様化や全国の学生の学力動向を長期にかつ一定の基準で測定されていない状況では、感覚で学力の動向を語らざるを得ないところがある。

全体に上がっている	5%
全体に下がっている	65%
特に変化は見られない	24%
その他	6%

- 2) 平成 18 年度入学者における英語の学力格差は以前(2～3年前)の入学者と比べて変わっているか

約6割の教員が2～3年前の学生に比べて英語の学生間の学力格差が拡大したと感じている。

学力格差が拡大している	61%
学力格差が縮小している	2%
特に変化は見られない	34%
その他	3%

- 3) 入学時の学生に求める英語の学力レベルは

入学者に求める英語の学力を、TOEIC、TOEFL、英検を例にそれぞれのレベルを求めるか質問した。入学時の学力の目安としているのは英検が最も多く、次に TOEIC、TOEFL と続く。入学時には英検が最も活用されていることがうかがえる。教員が求める入学時の各試験でのレベルの上位3位までは以下の通りとなっている。

	1 位	2 位	3 位
TOEIC	400点(24%)	450点(13%)	500点(12%)
TOEFL	450点(26%)	500点(15%)	420点(11%)
英 検	準2級(37%)	2 級(30%)	3 級(19%)

4) 英語のリメディアル教育(補習教育)の実施状況

学力の低い学生に対する英語のリメディアル教育を実施している大学は、実施していない大学の約半数で、同じ質問を大学教務課にしたが、両者の回答大学はイコールではないので回答に差があるのは当然だが、その差はもっと大きかった(教務担当者用 報告書参照)。教員の「その他の回答」欄に、学力別・習熟度別クラス編成を行っているとした大学が多く見受けられ、教員サイドとしてはこれをリメディアル教育ととらえるのに対して、教務課では通常の英語授業ととらえることで、この差が生じてくとも考えられる。

実施している	30%
実施していない	56%
その他	15%

5) リメディアル教育の授業時間数の確保の状況

授業時間数の確保については「十分である」と「不十分である」がそれぞれ同数であった。

十分である	44%
不十分である	44%
その他	12%

． 大学における英語教育について

1) 卒業時まで身に付けさせたい英語能力

卒業時まで身に付けさせたい英語能力としては、「英語で日常会話ができる」がトップで、「英文で手紙やEメールを書くことができる」、「英文の新聞や雑誌が読める」、「英語でプレゼンテーションができる」、「英文の専門書や論文が読める」と続く。会話能力と一般的な文章の読み書き能力がまず求められていることがわかる。

(複数回答)

英語で日常会話ができる	72%
英語でディスカッションができる	30%
英語でプレゼンテーションができる	40%
英文の新聞や雑誌が読める	60%
英文の専門書や論文が読める	37%
英文で手紙やEメールを書くことができる	62%
英文でレポートや論文を書くことができる	31%
その他	12%

2) 英語の能力別重要度

英語の能力を「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」、「ボキャブラリー」、「文法」、「異文化に対する知識」の7つに分けて、その重要さを5段階で問うた。

最も重要とされる5レベルに多かったのは、多い順に「読む能力」で、続いて「聞く能力」、「文法」、「ボキャブラリー」、「書く能力」、「話す能力」、「異文化に対する知識」であった。

<英語能力別 重要度(5段階)>

(5は重要度が最も高く、1は最も低い)

	5	4	3	2	1 及び無回答
聞く能力	42%	30%	19%	7%	2%
話す能力	29%	33%	28%	6%	4%
読む能力	51%	30%	13%	4%	2%
書く能力	30%	35%	22%	10%	4%
ボキャブラリー	36%	37%	19%	4%	4%
文法	37%	31%	27%	4%	2%
異文化に対する知識	27%	41%	25%	6%	1%

3) 卒業時の学生に求める英語学力を英語関連の資格試験を例にとると

卒業時の学生に求める英語の学力を、TOEIC、TOEFL、英検を例にとってそのレベルを質問した。上位3位までのレベルは以下の通りであった。

	1 位	2 位	3 位
TOEIC	600点(23%)	500点(19%)	400点(11%)
TOEFL	500点(28%)	450点・550点(10%)	
英 検	2 級 (40%)	準1級(32%)	準2級(11%)

4) 学内で団体受験を実施している英語関連試験

学内で団体受験を実施している英語関連試験で最も多いのが TOEIC で、ついで TOEFL、英検、TOEIC Bridge と続く。実施していない大学も約2割ある。TOEIC、TOEIC Bridge、TOEFL、英検以外の英語関連試験では「GTEC for STUDENTS」「工業英語検定」「CASEC」などが挙げられている。

(複数回答)

TOEIC	65%
TOEIC Bridge	6%
TOEFL	25%
英検	17%
実施していない	21%
その他の試験	8%

5) 英語関連試験の実施理由

英語関連試験を実施している大学に、TOEIC、TOEIC Bridge、TOEFL、英検の各試験別に、その実施理由を尋ねた。

TOEIC では「学生の英語力向上のため」、「就職に有利であるため」、「学生の学習意欲を向上させるため」、「企業のニーズに対応するため」が大きな理由となっている。

TOEFL は当然ながら「留学の条件、または留学に有利なため」が大きな理由となっている。

英検は「学生の英語力向上のため」、「学生の学習意欲を向上させるため」と日常の英語学習に関連して利用される傾向が強いようである。

(数値の見方は、資格試験ごとに から (縦列)の比較のみ有効) (複数回答)

	TOEIC	Bridge	TOEFL	英検
試験内容が学生のニーズと一致している	35%	30%	20%	29%
学生の英語力向上のため	66%	30%	35%	71%
学生の学習意欲を向上させるため	58%	40%	38%	61%
学生個々の英語力の現状を把握するため	40%	40%	23%	18%
学力の伸びや、学習効果を測定するため	38%	50%	20%	25%
プレースメントテストとして利用するため	18%	90%	13%	18%
全学または一部の学部・学科で受験・取得を目標としているため	18%	0%	13%	11%
企業のニーズに対応するため	55%	10%	0%	21%
就職に有利であるため	61%	20%	3%	29%
就職における学校推薦の基準であるため	5%	10%	3%	0%
留学の条件、または留学に有利なため	7%	0%	83%	7%
国際社会に対応するため	23%	10%	20%	22%
試験の結果がわかりやすいため	23%	10%	13%	29%
試験の実施回数・時期が丁度よいため	8%	0%	3%	11%
特定の履修科目において履修条件であるため	22%	0%	13%	4%
特定の履修科目が免除になる制度があるため	18%	0%	18%	14%
大学院受験の評価基準であるため	0%	0%	3%	0%